

エジプトの文化財保存修復・管理の学際的研究

研究代表者 近藤 二郎
(文学学術院 教授)

1. 研究課題

エジプト・アラブ共和国における古代エジプトの文化財の保存修復・管理の問題をエジプト現地において、国際協力のもとに実践すること目的としている。具体的には科研費の助成を受けたエジプト・ルクソール西岸アル＝コーカ地区における岩窟墓の保存・修復、カイロ近郊アル＝ギーザ地区のクフ王の第2の太陽の船などの作業を中心として展開している。

2. 主な研究成果

2016年度においては、エジプト・アラブ共和国において、いくつかのフィールド調査を実施した。主要なものでは、カイロ近郊のアル＝ギーザ台地において古王国第4王朝クフ王の大ピラミッド南側に位置する2基のクフ王の船のピットの中で西側の第2のピット内に残存するクフ王の第2の太陽の船の解体された大型船の部材の取り上げ作業と取り上げた木製部材の保存・修復作業を継続して実施した。現在、展示・公開されているクフ王の第1の太陽の船の場合と比較して、私たちが作業を実施しているクフ王の第2の太陽の船の部材は、保存状態が著しく悪く、部材の取り上げにも細心の注意が必要である。また部材事態を構成している木材が非常に脆弱であるため、部材の修復と固める作業に多くの時間を費やしている。

部材は、ピット内部に幾層にもなって堆積して位置しているため、近い将来の船の復元作業のために、3次元計測機を使用して部材の性格な位置測定を実施している。この現地での作業はJAICAの協力の下で実施されている。保存修復・強化処理が終了した部材は、アル＝ギーザにある大エジプト博物館の保存修復センターに運び入れる作業もあわせて実施した。現地の大ピラミッド南側に位置するクフ王の第1の船の博物館は、当初は、内部の復元されたクフ王の第1の船をアル＝ギーザの大エジプト博物館に移転する計画があったが、現時点では、この計画は実施されないことが正式に決定した。そのため、私たちが保存修復作業を実施しているクフ王の第2の太陽の船を大エジプト博物館において組み立て作業とともに展示する計画を交渉中である。

南のルクソール西岸アル＝コーカ地区において継続実施している新王国時代岩窟墓調査は、科学研究費・基盤研究(A)海外学術・研究課題「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」、研究課題番号：15H02610の助成を受け2016年度も調査を実施した。2016年度は、アル＝コーカ地区の調査地において長期の発掘調査・修復調査

を実施した。特に、発掘区の南部において2013年12月末に発掘調査の過程で新発見された岩窟墓（コンスウエムヘブ墓：KHT002）は、「ムウト（神殿）のビール醸造長」の称号を持つコンスウエムヘブのもので、墓内部の壁面装飾から、第19・20王朝（ラメセス朝時代）に属すると判断された。2016年度は、墓内部の壁画の状態の詳細な研究を実施した。壁画の状態の詳細な観察作業を実施することで、本格的な保存・修復作業に向けた壁面のコンディション・サーベイとして写真記録や損傷図面を作成した。目視による観察の結果、コンスウエムヘブ墓壁面に使われているプラスタには、大別して2種類の調合素材の異なるものが使い分けられていることが判明している。ひとつはナイル・シルトなどの粘土材料に細砂やスサとみられる直物繊維を練り混ぜた土壁であり、もうひとつは、石膏あるいは消石灰と砂を混ぜた漆喰である。また、現地の専門家の協力を得て、壁面の修復材料の調査をおこない有力な知見を得ることができた。さらに東京理科大学の中井泉研究室の協力を得て、コンスウエムヘブ墓の内部において、可搬型分析装置を持ち込み、壁面に使用されている壁画顔料の非破壊オンサイト複合分析を実施することができた。

3. 共同研究者

吉村作治（東日本国際大学・学長）
西本真一（日本工業大学・教授）
馬場匡浩（早稲田大学高等研究所・准教授）
中井 泉（東京理科大学・教授）
前川佳文（東京文化財研究所・研究員）
河合 望（金沢大学・准教授）

4. 研究業績

4.1 学術論文

Kondo, Jiro and Nozomu Kawai, *Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb, Egyptian Archaeology*, Issue 50, Spring, pp.22-26, 2017年2月

近藤二郎「ブリュッセル、王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ（E.2157）」、『WASEDA RILAS JOURNAL』No.4、早稲田大学総合人文科学研究センター、7-15頁、2016年10月、7-15頁

近藤二郎ほか「第9次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第23号、43-65頁、2017年3月、

4.2 学会発表

近藤二郎「古代エジプトの祝祭都市テーベ」『中国都城・シルクロード都市遺跡の考古学的研究』城倉正祥・ナワビ矢麻編、早稲田大学東アジア都城・シルクソード考古学研究所調査研究報告第2冊、118-122頁、2017年3月、早稲田大学戸山キャンパス

4.3 招待講演

近藤二郎「古代の天文学エ」『2016年度四学会合同講演会・アジアの天空』、基調講演 2017年2月、早稲田大学戸山キャンパス

5. 研究活動の課題と展望

エジプト・アラブ共和国においては、2011年1月に起こった所謂「アラブの春」事件以降、長期政権の退陣と大統領選挙による新政権への移行、クーデターによる軍事政権の誕生など社会が大きく変化した時代を経験している。そのために、考古行政の分野においても、旧政権下とは異なった取り組みが始まろうとしている。しかしながら、なかなか新たな行政の指針を定めるにはまだ少しの時間的な猶予が必要である。アラブ世界全般に言えるテロなどによる社会の不安定状況や経済不況などによる民衆の動揺など社会全体での安定化にも時間がかかると思う。

また、上記の状況に関連し、軍事政権下では外国の調査隊に対するセキュリティー審査が従来とは比べ物にならないほど厳しくなっており、欧米の調査隊の中にはセキュリティーの許可が下りないまま調査が実施できないものも少なからずいる状態である。幸いなことに、私たちの早稲田大学およびその関連調査隊は、セキュリティーの許可をもらい長期間にわたり調査を継続することができた。こうした事情を考慮しながら、今後はエジプト政府・考古省との連携を強めながら国際協力の下でエジプトにおける文化財の保存修復および管理に関して積極的に実施していくことが肝要である。